

聖ルカ福音書第7章36節～50節

於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

先主日の福音書は、ナインのやもめの一人息子を、イエスさまが甦らせた物語でした。悲しみと絶望で涙を流すことしかできなかつたやもめに、イエスさまは、はらわたがちぎれんばかりに深く同情をして、「泣くな、もう泣かなくともよい」と言って、そのやもめの涙を拭われたのでした。

今日、登場する女性、罪の女と呼ばれていますが、この女性もまた涙を流しています。イエスさまの足を涙でぬらし、自分の髪の毛で拭うほどの大量の涙を、後から後から止めどもなく流し続けたのですが、この女性の涙はどのような涙だったのでしょうか。

場面はファリサイ派シモン之家にイエスさまが食事に招かれた席でのことです。ナインの若者を甦らせた出来事に、人々は、「大預言者が我々の間に現れた」と言って神さまを賛美しました。その噂は直ちに広まって行ったことでしょう。シモンもそのような先生だからこそ、一緒に食事をし、親しく教えを聞きたいと思って招いたのでしょう。

そこへ思いもよらず、町では知らない者が一人もいない悪い噂の女が入り込んで来たのです。ルカは、はっきりと「罪の女」と書いています。町中に知られている「罪の女」と言ったら、どんな女性を思い浮かべるのでしょうか。聖書には、その罪がどのような罪であったか、全く書かれていません。それにも拘わらず、この罪は売春であった、この罪の女は娼婦であったと、教会の歴史の早い時期から解釈されつづけてきました。女の罪と言えば売春であると決めつけるのは、男性中心的な身勝手な解釈とも考えられますが、しかし、今なお、多くの注解書は「罪の女＝娼婦」と取っています。

その罪の女も、また、イエスさまの御業を噂に聞いて、この方以外には汚辱にまみれた底なしの泥沼生活から自分を掬い上げてくださる方他にはないと、必死な思いでシモン之家の客となっているイエスさまを訪ねたのでしょう。

遠藤周作は、この場面を次のように描いています。

「女は一軒の家からあかるい灯が洩れているのを見て、そっと近づいて見ました。それはシモンという、この町でも有名な人の家でしたが、その庭ではたった今、神殿にいたキリストが主人となにかを話ししているようです。女は庭の片隅に忍びこんで、そっと中を覗こうとしました。『何をしているのだ。』この家の下男が彼女を見とがめて声をかけました。『お前などの来るところではない。』しかし女は聞こえないふりをしてキリストのうしろに近づきました。『出ていかないと痛い目にあわすぞ。』荒々しく追いかけてきた下男たちの声にキリストは背後をふりかえり、自分の前に悲しげに立っている女の顔を見ました。突然女の顔から大粒の泪があふれ、真珠の粒のように一滴一滴、彼の足をぬらしたのです。この熱い泪からキリストは女の悲しかった

過去、みじめだった人生を理解したのです。『安心するがいい。』彼の唇から力強いその一言が洩れました。」このように描写しています（『聖書の中の女性たち』）。

この罪の女は、自分では背負いきれない悲しみを負いながらイエスさまに近づいて行ったと言うのです。女の流す涙は悲しみの涙で、その悲しみの涙がイエスさまの足をぬらした。その時、イエスさまはこの女の悲しみを深い共感をもって受け止められたのです。

しかし、ファリサイ派のシモンは、イエスさまとは異なった態度を取りました。この女がイエスさまにしていることを、冷ややかに眺めて心の中で呟くのです。「もしこの男が預言者なら、この女がどんな種類の女か、たちどころに見抜くはずだ、そして女を直ちに遠ざけるはずだ。しかしそれをしないで、女のなすがままに任せている。そんな男は預言者であろうはずはない」とイエスさまを、内心、蔑みさえしたのではないのでしょうか。

そのシモンにイエスさまは短いたとえを話して聞かせます。それぞれ 500 デナリオンと 50 デナリオンの借金のある 2 人の人が金貸しからその借金を帳消しにして貰ったたとえです。罪の赦しは福音書のほかの箇所でも負債の免除にたとえられています（マタイ 18：23）。シモンはこのたとえを聞いて、自分は借金の少ない方の人間だと考えたのでしょうか。それとも、神さまに対して胸を張って堂々と、わたしは罪を犯していません、負債を一銭も負ってはいませんと申し開きが出来ると、自信に溢れた態度を取ったのかも知れません。

ファリサイ派は、自分たちは律法を守る正しい人間だと自認していました。自分たちは、律法を守ることでできない人たちとは決定的に違う人間だと意識していました。その根本にある考え方は、借金はチャンと耳をそろえて返さなければならない、罪は償うべきであるということでした。人間の努力によって償わなければならない、償うことが出来ると考えたのでした。自分の力では超えることの出来ない罪の深淵を覗くことがなかったのです。

シモンにとっては、罪の女が自分の食卓に近づいてくることなど、我慢のならないことだったでしょう。罪人と交わったら自分たちも罪人になってしまうとして、交わることを避けていたからです。初めのうちは、この女の振る舞いをいまいましい思いで眺めていたのでしょう。

しかし、この女の行為はシモンの目には余りにもなまめかしく映ったのではないのでしょうか。髪の毛で涙を拭ったり、繰り返して口に口づけしたりするなど、やはり商売女のやり口をそのまま丸出しにしていると、この女に対して審きを通り越して怒りすら感じながら、目を背けて見ようとしないのでした。

イエスさまはシモンに、「この人を見ないか」と言っています。遠藤周作流に言えば、この人の負ってきた悲しみを見ないか、と言うことでしょう。この人のこぼす涙の意味を汲み取らないかと呼びかけられたのです。

話は変わりますが、新美南吉という童話作家が書いた、「でんでんむしの悲しみ」というお話があります。一匹のでんでん虫が、ある日大変なことに気

がつきます。わたしの背中の殻の中には、悲しみが一杯詰まっているではないか、どうしたらよいでしょう。そこで、友だちのでんでん虫を訪ねて言うのです。「わたしはもう生きてはいけません。」「どうして?」「わたしは何という不幸せな者でしょう。背中の殻の中には、悲しみが一杯詰まっているのです。」すると友だちのでんでん虫が言いました。「あなたばかりではありません。わたしの背中にも悲しみは一杯です。」そこで別の友だちを訪ねます。その友だちも、更に別の友だちも、どの友だちも、皆、同じことを言うのです。そこで、でんでん虫は思うのです。「悲しみは誰もが持っているのだ。わたしばかりではないのだ。わたしはわたしの悲しみをこらえていかなきゃならない。」そう言ってもう嘆くのを止めるのです。こんなお話です。

皆さんはこの童話を聞いてどのようにお感じになったでしょうか。人は誰もが悲しみを背負いながら生きています。そして一人の人の悲しみは、友だちにも分かってもらえない。誰にも理解してもらえず、その人にだけしか分からないものだとしたら、それを必死になってこらえていかなければならないのでしょうか。人生というのは、そのような孤独の中を生き抜くことなのでしょう。もし、そうだとしたら人生は残酷なものと言わなければなりません。

罪の女は、その残酷さを誰よりも良く知っていた人だと思います。誰からも白い目で見られ、男たちは好奇の眼で近づいて来て弄ぶだけ弄んで、結局は冷笑を顔に浮かべて去って行くだけです。女たちは眉をひそめて遠くから噂しあいます。厳格なユダヤ教の指導者たちからは石でもって追われることもあったことでしょう。

この人の心は何時しか固く冷たく閉ざされていたでしょう。涙を流すことなど、久しく忘れていたのです。誰からも分かってもらえない悲しみを、ただ一人背負って行くことに疲れ果てて、でんでん虫のように、「わたしはもう生きてはいけません」とギブアップしようとしたときに、イエスさまのことを聞いたのです。この人は、ほかの人とは違う、そう感じ取ったのだと思います。

イエスさまは、徴税人のレビを弟子にしたときに仰いました。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」(5:31,32)。

この女性はイエスさまの御言葉にすがるほかないと心に決めて、シモンの家の客となっているイエスさまを訪ねる決心をしたのです。野良犬のように追い払われることを覚悟して、シモンに家に入っていったのです。イエスさまに賭けるほかなかった。勇気をふるって場違いな席に入って行きました。そこでイエスさまの赦しに触れました。「あなたの信仰があなたを救った」とイエスさまをひたむきに信頼する心が認められたのです。

この女性の悲しみの涙は、イエスさまの暖かさに触れることによって、悔い改めの涙となり、更に赦された感激と喜びの涙に変わっていきました。イエスさまの足を感謝のうれし涙でぬらし髪の手で拭き、香油と口づけをもって愛と尊敬を表したのです。パウロがそこに福音を見出したように、「罪が

ましたところには、恵みはなおいっそう満ちあふれ」た(ロマ5:20)のです。

「安心して行きなさい」とイエスさまは重ねて言われました。この人はどこへ行ったらよいのでしょうか。安心できる場所とは、どこなのでしょう。もう白い目で見られることもなく、好奇の目で迎えられないこともない場所です。それは同じ立場の人たちがいるところです。この人が必要としているのは、罪が赦された者たちが形成する交わりです。それは教会です。教会が必要とされているのです。その教会は赦された者を心から歓迎して迎える共同体でなければなりません。

今日の福音書は、わたしたちの交わりが、罪の女の悲しみに共感し、罪を赦された者としての喜びに生きている交わりであるか否かをも問うているのではないのでしょうか。わたしたちの教会が、主イエスさまの期待に応えられる交わりを形成していくことができるよう、導きを祈りましょう。